文化的景観研究集会（第２回）の開催

景観研究室では、2009年12月18・19日の２日間に渡り、文化的景観研究集会（第２回）「生きたものとしての文化的景観－変化のシステムをいかに読むか」を開催し、200名余りの参加を得ました。文化的景観は、物理的なモノありきではなく、読解によって浮かび上がってくる領域的なまとまりであること、そしてそれが時間をかけて徐々に形成されたもので、現在も生き、変化しながらもアイデンティティを保ち続ける、いわば生き物のごとき性格を有するものです。本年度の研究集会では、「生きたもの」としての文化的景観における変化のシステムのとらえ方を、議論の主題として設定しました。

１日目は、「文化的景観における変化のシステム」をテーマとしました。文化的景観における変化の現象把握としては、横張真氏による近江八幡の水郷景観における葦原の変遷が示唆に富んでいます。50年間の葦原の領域を追いかけると、明らかに場所が移動していながら、面積の総和には大きな変化がないことが明らかにされました。

変化に関しては有形の要素が問題にされやすいわけですが、文化的景観は有形と無形の要素が相互に絡み合いながら成り立っているものであるため、２日目は、有形と無形の関係、つまりモノとコトの関係をテーマとしました。モノにこだわりすぎると、変化を必然とする文化的景観の本質を見誤ることが指摘されましたが、言い換えれば、モノとコトを横断的にとらえねば文化的景観の価値評価はなしえない、という提言と受け取ることができます。

モノとコトとのバランスを、いかに現状の保護制度によって担保していくのか。この議論を次年度以降の活動に活かしたく思っています。

（文化遺産部　清水 重敦）

文化的景観研究集会（第2回）における総合討議